●シリーズ●わが町の文化財〈97〉

世羅町重要文化財　古瓦

昭和55年7月21日指定

広島県史跡康徳寺古墳の東側一帯には古代寺院跡の礎石及び布目瓦の分布するところがあり、古くから寺跡が想定されていました。写真の古瓦は、想定地付近から出土したもので、古代寺院に見られるような複弁蓮華文をもつ直径20㎝の軒丸瓦です。備後地方の特色として瓦頭の下部に水切りと呼ばれる三角状の突起がついています。この三角状突起のついた古瓦は、三次などの県北地域での発見が多いものです。

これらは古代世羅の地に大寺院の存在を証拠づけるもので、平成3年度～平成6年度にわたり、広島大学文学部考古学研究室・広島県教育委員会文化課（当時）の指導の下、世羅町教育委員会が実施した発掘調査により、白鳳時代末期から奈良時代にかけて存続した法起寺式伽藍配置をもつ寺院があったことが判明しました。

写真の資料は、康徳寺が所蔵する瓦で、かつて寺の下方から採収されたものです。なお、康徳寺廃寺では、平成の発掘調査により各種の瓦や仏像の螺髪などがたくさん出土しています。

また、康徳寺廃寺の瓦類は、世羅町三郎丸で発見された窯跡で焼かれたものと推定されています。

●シリーズ●わが町の文化財〈98〉

世羅町重要文化財　黒渕山論文書及び古文書

昭和59年10月9日指定

本文書群は、世羅町黒渕の清水家に伝わった古文書群で、平成24年に世羅町教育委員会へ寄贈され、現在は大田庄歴史館に保管されています。黒渕村の山論文書（山の土地境に関する文書）、地坪帳（公式の面積と、実際の面積の相違を調整した時の記録）など中世から近世にかけての貴重な古文書が31通と2枚・2冊が伝わっています。近世の歴史研究上貴重な資料です。

大きく分けると①中世期からの山論文書、②江戸時代の年貢関係文書、③黒渕八幡宮関係文書、④庄屋関係の書状類ほか。

特に山論文書は、永正6（一五〇九）、永禄5年（一五九六）慶長20（一六一五）以下、元和・寛永・元禄とつづいています。

年貢関係では、寛永15年（一六三八）の地詰帳や享保18年（一七三三）の御年貢米納中専用帖、地坪関係の文書などがあります。この他、宮に関しては、延宝9年（一六八一）や正徳元年（一七一一）頃、宮建立や御輿購入に関わる古文書やその他庄屋関係の書状類などがあります。